

保育所乳児における精神発達の推移について

大阪市立大生活科 岩堂美智子

目的 保育所に早期に入所した子どもたちの発達を追跡し、集団保育の経験とともにそれらがどう推移するかを検討し、保育所保育の効果と問題点を明らかにしたいと考えた。

対象と方法 対象児は大阪府下の公立保育所26個所に在籍する乳児43名。発達の評定は津守・楢毛式乳幼児精神発達診断法により、各領域別にDQを算出した。各々の子どもの担任保育士が、6月初旬に才1回目の評定を、続いて半年経過した時点で才2回目評定をおこなった。なお、才3回目は、2回目より1年経過後、才4回目はさらにもう1年経過した後で評定をおこなった。結果は、1980年度から3年間にわたり実施したものを集計した。

結果と考察 I. 生後6か月未満より保育所に入所した子どもたち(43名)の発達の推移 「運動」「社会」「生活習慣($P<0.05$)」「言語・理解($P<0.01$)」「総DQ)において2回目の評定時より2回目および3回目、4回目の方がDQ値が上昇した。一方、「探索・操作」領域では、統計的に有意ではないが、1回目と2回目、3回目と4回目間で後者のDQ値が下降を示した。II. 1回目評定時総DQが80以下を示した子どもたち(33名)の発達の推移 2回目評定時に各領域のDQが急上昇を示した。年齢別に差違が認められるが、ここでも「探索・操作」領域のDQ値が若干下降を示した。「言語・理解」と「社会」の領域でも、2回目と3回目間で若干後者のDQ値が下降した。以上の結果から、保育所乳児の発達は、おおむね前進しているということができるが、特定の年齢と特定の領域との間に見られる発達の足ぶき状態を、保育内容の見直しを通して今後検討していく必要があると考える。